北海道中山間ふるさと・水と土保全対策事業／北海道里づくりアドバイザー情報誌

里づくり

第３号　２０１２年１月

編集・発行/北海道農政部農村振興局農村整備課
〒060-8588　札幌市中央区北３条西６丁目
TEL　011-231-4111　/　FAX　011-232-4128
E-mail:nosei.noson1@pref.hokkaido.lg.jp

雨竜沼湿原　登山ガイド（外山陽一氏提供）

CONTENTS

- **地域づくりリレーインタビュー**
  塚本むらまち計画研究室　塚本　保弘　氏／砥山ふれあい果樹園　瀬戸　修一　氏
  「都市住民との協働による農村地域の魅力発信」
- **北海道里づくりアドバイザーレポート　　雨竜町　外山　陽一　氏**
  「雨竜沼湿原に魅せられて」―『愛郷無限』美しい農村環境をそのまま未来人へ―
- **特集　株式会社きのとや　代表取締役　長沼　昭夫氏**
- **ＢＯＯＫＳ　『地域再生**　～行政に頼らない「むら」おこし』
- **トピックス**

―人に学び、地域に学び、いまできることから始める―

「都市住民との協働による農村地域の魅力発信」
～札幌市南区砥山地域の農家を支える八剣山発見隊～

塚本むらまち計画研究室　塚本　保弘氏
砥山ふれあい果樹園　瀬戸　修一氏

塚本　保弘（つかもと　やすひろ）氏
興部町生まれ。昭和 50 年道職員として林務部に採用。以降、厚岸林務署、十勝支庁、住宅都市部、東京事務所、建設部を歴任。平成 22 年 3 月に北海道を退職し、現在「塚本むらまち計画研究室」を主宰。北広島市在住。

瀬戸　修一（せと　しゅういち）氏
札幌市生まれ。高校卒業後北海道を離れ、大学と就職は本州。平成 10 年 5 月にＵターンして実家を継ぎ、「砥山ふれあい果樹園」を経営。砥山農業クラブ代表、八剣山発見隊事務局長、南区の果樹と農業を考える会会長。

今回は、「塚本むらまち計画研究室」を主宰する塚本保弘さんと、札幌市南区で「砥山ふれあい果樹園」を経営されている瀬戸修一さんのお二人にお話をお聞きして来ました。

―塚本さんは元道職員ということですが、現在の活動内容をお聞かせ下さい。

塚本／平成二十二年に北海道を早期退職し、現在は在職中から携わっていた砥山地域の地域活動を支援しているほか、下川町でフルーツトマトやアスパラを生産している親戚の農家のお手伝いをしています。

　また、私が携わった地域活動については「むらまち通信」を発行して関係者に情報発信をしていますが、昨年末で七十号になりました。

―砥山地域の地域活動に携わるようになったきっかけは何ですか？

塚本／平成十一年に「森林化社会研究会」を作って森に関する勉強会を実施していたんですが、そのメンバーから「砥山地域の果樹農家が大変な状況にある。地域を活性化させる方策を考えたい」とススキノの居酒屋に呼ばれたんです。行った時にはすでにメンバーの一員になっていました。（笑）

　平成十四年二月のことです。

―瀬戸さんは、どのような経緯で活動されるようになったのですか？

瀬戸／私はこの農園の四代目になります。本州の大学に行き、関東で就職して十三年前にＵターンで戻ってきましたが、その当時、砥山地域や隣接する地域は活力のない状況でした。農家は百軒ほどありましたが、七十歳前後の高齢者ばかりでした。りんごは市場に出しても値がつかず、箱代で赤字になる。夜中にこっそりりんごを崖から捨てている人もいたくらいです。

　「砥山」という集落があることさえ知る人も少なく、私が南区役所に出生届を出しに行った時に、この集落は何て読むのかと職員から聞かれるありさまでした。

―砥山地域は危機的な状況だったのですね。

瀬戸／農業で食べていくことが難しい。親も子供に後を継がせようとは思わない。子供も継ぎたいとは思わない。風景がこんなに美しく、札幌の市街地に近い好条件にあるのに、何でこんな風になるんだという思いでした。このまま十年、十五年したら、誰もいなくなってしまうと強く思いました。

―そこで、何とかしなくてはと動き出した。

瀬戸／砥山地域の農家同士で相談や協力したりする場が必要だと考え、平成十二年に「砥山農業クラブ」を組織しました。

　しかし、地域の外の人たちの力を借りて地域の魅力を発見することが効果があると考え、塚本さんをはじめ、イベント会社の社長、陶芸家などに働きかけたのです。その結果、「八剣山発見隊」が設立されたのです。

―八剣山発見隊の活動内容を教えてください。

塚本／八剣山周辺の美しい自然と環境を守るとともに農業を通した地域の活性化を目的としています。

　これまでさくらんぼ祭りや八剣山周辺のゴミ拾い、果樹剪定講習会など様々なイベントを開催して、環境保全や地域の活性化を図ってきています。

―塚本さんが、砥山地域に長い間惹かれている理由は何ですか？

塚本／少しでも地域を活性化させたいと積極的に活動している瀬戸さんがいること、季節により様々な表情を見せる八剣山と周辺の景観、それと地域で収穫されるおいしい果物ですね。（笑）

―当初、これらの会に対する集落の反応はどうでしたか？

瀬戸／さくらんぼ祭りにしても、当初は「毎日の仕事が忙しいのに、プラスアルファーとしてこんな事は出来ない」「たった二日間のイベントで収入になるかも分からない」「そもそも、こういうことをすること自体反対。や

るならメンバーから外れる」などと言われました。

八剣山発見隊の方からは「地元で話がまとまらないのは良くあることだ。まずは、やる気のある人たちで実践していこう。」とアドバイスをもらいました。そこで、お手伝いしたいという人が集まって、昔の勝手連のような活動形態で動きだしたのです。

ただし活動方針案は集落の人たちに報告し了解を得る、迷惑にならない範囲で実施するということでやりました。外からの助言があってこの問題を乗り越えることができたのです。

―現在はどうですか。

瀬戸／農家の意識が、がらっと変わりました。さくらんぼ祭りに、いまでは五千人ほども来るようになり砥山の知名度も上がって、農家から果物を直接買っていくお客さんも増えました。現在では直売所が、南区に八ヶ所くらい出来ているんです。

塚本／瀬戸さんのところでは、りんごの注文が多くて断っている場合もあるくらいです。

―砥山農業小学校とは、どのような活動なのですか？

塚本／小学生とその家族を対象として五月から十月までの年六回、果樹を中心とした農業体験を実施しています。

平成十五年に開校しましたが、これまでに四百人を越える皆さんが参加しており、子供たちだけではなく、大人の方々も農業体験を楽しんでいます。

楽しかったとか大変参考になったという感想が数多く寄せられているほか、授業の日以外にも友人と一緒に果樹園を訪れる方が増えています。

―このような活動が評価されているのですね。

塚本／これまでにテレビや新聞で取り上げられたり「コープさっぽろ農業賞」で札幌市長賞を受賞したほか、「平成二十二年度オーライ！ニッポン大賞」では全国表彰を受けるなど、多くの皆さんから評価されています。

最近は全国各地から視察に訪れたりＪＩＣＡの研修で各国政府関係者や韓国からも農業視察団が訪れています。

―これらの活動に対して、行政などの支援はあるのですか？

塚本／行政から補助を受けた場合、やりやすいのは確かですが、支援が無くなった時にこの活動を続けることは難しいと思います。はじめから補助金に頼らないよう強く訴えた結果、もらわなくても行える体制を整えることができ、長期間続けてこられています。

今は補助金をいただけるのであれば喜んで受け取ります。（笑）

―地域づくりを進める上で、他の地域にも参考になるポイントはありますか？

塚本／地元の熱意も必要ですが、地元以外の人たちと、どのように結びついていくかが重要だと思います。特にその地域のファンを作ることで結びつきを深め、議論を通して様々な提案やアイデアが出されるとともに、実行に当たっては、得意分野を生かした役割分担をすればいいのです。例えば農家の人が文書や書類の作成が苦手であれば私のような行政経験者が受け持つなどみんなで応援することが大切です。

瀬戸／地元で意識の高い人がいても、浮いた存在、変わり者として潰されてしまいます。地域外に仲間を増やし、皆で応援すべきです。農家は地域外の人に手伝ってもらったら、お礼をしなくてはとか、どう対応したらいいのか分からないと言います。しかし、地域社会の中で必要とされていることに、積極的に関わりたいという価値観を持つ人もたくさんいます。そういう人々の力が入ると、地域は変わってきます。そして私のような地元のリーダーは調整役になることです。私も出過ぎず、地域の人の気持ちを逆なでしないようやっていくのには神経を使いました。

地域づくりを進める上で、いろんな業種の人がいることは、何をするにも人の繋がりや活動に広がりが出ます。

―今後、何かやろうとしていることはありますか？

瀬戸／いま「南区の果樹と農業を考える会」愛称「ぶどうの会」を立ち上げて、南区の農家全体のネットワークを作っています。「ぶどうの会」としたのは、砥山地域にワイン工場ができ、ぶどうの加工ができる可能性が出てきたこと、ぶどうの房のように人と人が繋がっていくのをイメージしてです。

いろいろな補助や制度はありますが地元の農家がやる気になる仕組みや組織ができないことには、何も始まりません。砥山地域の農家と八剣山発見隊のような取り組みが南区全体に広がっていけばと思っています。

―塚本さん、行政職員に対して何かメッセージはありますか？

塚本／特に若い人は、いま住んでいる地域のイベント等に積極的に顔を出し多くの人との繋がりを作ってほしいと思います。

私が地域活動に携わるようになったのは十年ほど前からですが、そこで築いた人との繋がりは、今では私の大きな財産となっています。

一歩だけ勇気を持って踏み出して積極的に人と繋がりを作ることは、行政職員として、そして自分自身の幅を大きく広げることになります。

―瀬戸さんの今後の目標は何ですか？

瀬戸／お客さんが来てくれて売れる環境になってきましたが、農業として大きな所得に結びつかないと後継者が育ちません。もう一踏ん張りし、農業で十分生計を立てることができる地域づくりを目標に頑張りたいと思います。

―大変貴重なお話し、有り難うございました。

北海道里づくりアドバイザーレポート

「雨竜沼湿原に魅せられて」
―『愛郷無限』美しい農村環境をそのまま未来人へ―

雨竜町　外山　陽一氏

外山 陽一（とやま よういち）氏
昭和２６年雨竜町生まれ。高校卒業後、雨竜土地改区採用。現在、雨竜水土里ネット参事。ふれあいファーム暑寒パストラル事務局長、ＮＰＯ法人北海道田園生態系保全機構理事、雨竜沼湿原を愛する会事務局長。

今回は雨竜町の里づくりアドバイザーとして、自然や雨竜町を愛し、後世に残したいと活動している外山さんにインタビューをしました。

日焼けした顔、やさしい雰囲気を持つ里づくりアドバイザーの外山さん。ご自身が雨竜町の地域づくりに取り組むのは、故郷を想う愛と言い切る。こんなまっすぐな想いは、中学生のある出来事以来変わってはいない。

中学校二年生の夏休み、友達と雨竜沼湿原に行くことを企画した外山さん。当時は、道路や登山道も整備されていない秘境で、学校の許可が必要な場所。担任が同行することでなんとか許され、初めての雨竜沼湿原登山が実現した。

それはとても暑い日だった。真夏の太陽が照りつける中、外山さんたちは自転車で湿原の登山口に向かった。私も雨竜沼湿原に登ったことがあるが、もちろん車で登山口まで行っている。舗装もされていないあの山道を、汗だくで自転車を漕ぐ外山少年の姿が目に浮かぶ。

一時間ほどの登山で雨竜沼湿原に到着した時、外山少年は楽園に立っていた。平野と澄んだ水をたたえる沼が広がり、きれいな高山植物の花々が咲き乱れている。「山の上にこんな空間があるのか。」と心を打たれた。

浮島に飛び乗ったり、裸になって沼の中に入ったり。沼底の水は氷のように冷たくて、外山少年は足を伸ばすことが出来なかった。この水の冷たさを、今も鮮明に覚えていると言う。外山さんの熱のこもった口調から、キラキラしたかけがえのない時間を過ごしたことが伝わってくる。

雨竜沼湿原　新緑の地塘群

外山さんの自然に対する敬愛はこの時に育まれ、その後湿原を守る活動へと繋がっていく。雨竜沼湿原は、平成二年に道立自然公園から国定公園に昇格している。知名度や登山ブームもあり湿原への登山者は年々増え続けていった。

そんな時、外山さんは衝撃的な光景を目にする。湿原に土埃が立ち上っていたのである。登山者の増加により湿原内の踏み荒らしが増え、乾燥化が進んでいたのだ。乾燥化は笹の侵入を招き、湿原を喪失させる。「これは大変な事になっている。どうにかしなければ」と、山岳会や地元のメンバーに声を掛けて「雨竜沼湿原を愛する会」を立ち上げた。以来、清掃登山や後世に湿原のデータを残すための学術調査を行い、地域の人達と湿原を見守り続けている。

誰よりも雨竜沼湿原を愛する外山さんにとって、平成十七年は大きな喜びの年となった。ラムサール条約の登録湿地として認定されたのである。このように世界的に価値が認められることは、町民や子供達の心の誇りとなり、雨竜沼湿原を大切にしてくれることに繋がると外山さんは考えている。

当時、岡本洋典さんという有名な写真家が、雨竜沼湿原の写真集を出していた。岡本氏は浦臼町に住んでいたが、外山さんは岡本さんのところに行って「雨竜沼の写真を撮るなら雨竜町に住むべき」と言って、住む家も手当して連れてきたそうだ。強引な人材勧誘だ。

しかし、今では岡本さんの写真は、道の駅のギャラリーで展示さている。そのギャラリーでは、子どもなどに岡本さんの写真セミナーが開かれるなど、湿原の魅力を伝える文化的活動に発展しているのである。

また、外山さんの想いは湿原だけに止まらない。雨竜町に愛着を持ち、縁があって生計を立てている者がいつまでも雨竜町に住めるようにしたいと強く願っている。この郷土愛は、厳しい現実体験からきている。

昭和五十七年の札沼線廃止に合わせて、町内六校あった小中学校が一校に統合され、雨竜沼湿原の通り道に有った国領地区は住民の集団移転も行われた。そして、人が

雨竜沼湿原　地塘とエゾカンゾウ

住まなくなった国領地区は、人家跡も分からないほどの、完璧な山野に返ってしまった。後継者不足、高齢化といった今の農村地域の最悪のシナリオ。

雨竜町に開拓の鍬が入ってから百二三年。原始林を切り開いて作られた美田が、山野に戻ってしまった国領地区を見て、外山さんは愕然とした。

その時の、悲しみと憤りは、雨竜町が美しい農村地域として存続し続け、後世に受け継がれる景観保全活動へと繋がる。活動組織として地域住民と「暑寒パストラル」を設立し、景観保全のみならず都市と農村の交流など活発な活動を行い、高い評価を受けている。

外山さんが自宅前に掲げるメッセージ看板には、『愛郷無限』美しい農村環境をそのまま未来人へ」と書かれている。外山さんの切なる願いが込められている。

外山さんが地域づくり関わるようになった経緯を伺うと、雨竜町産業祭りの集客や活性化を検討する実行委員会のメンバーに選ばれたのが始まりだそうだ。このメンバーに選ばれたのは、仲間の推薦があったから。

その流れで、当時の空知支庁が企画した「まちびとの集い」に出席したことで、人の繋がりや活動の幅が広がったという。このメンバーで立ち上げた広域まちづくりネットワーク「270万石空知結ばん会」には楽しい想い出があるそうだ。江戸幕府になぞらえ将軍を立て、知事は赤レンガ城主・大目付が支庁長、各市町村に藩主や北町奉行・南町奉行を置き、年一回の総会には横路知事が将軍姿で登場したというエピソードも。当時のメンバーのセンスの良さ、斬新さが感じられる。

今では当時のような華々しい活動ではないそうだが、現在も当時の仲間との交流は続き、外山さんの活動の原動力となっている。「自分の活動は、『農業を振興しよう、地域を振興しよう』という想いから入っている。そして、自分の活動を助けてくれる仲間がいることが大切。」と語る外山さん。まっすぐな性格と温厚な人柄だからこそ、良き仲間を呼ぶのだろう。

外山さんが今後目指すところを伺うと、「雨竜町が本当に美味しい米の基地となること。農業のある雨竜を残すこと。自分の人生でできることはそこだと思っている。農業を守り、地域を守ることは、ふるさとを想う心、いわゆる「愛」です」ときっぱり。この想いが、地域の人たちや子供たちに受け継がれていくことを切に願うばかりである。

最後に、指導員はどんな役割を発揮すべきかを伺ったところ、こんなメッセージを頂いた。「地域に根差して、地域の方々と連携することが大切。指導員相互の繋がりも有益ですし、見学型から実践型にすることで、人の心に残り、支えとなる行動力に繋がる。実践を積み重ねていくことで資質を高めることになる。指導員としての自覚と役割の重みを受け止めて、地域への情報発信や自らがその機会をつくる努力をする。そうすることで、仲間ができます。一人で出来なくても、仲間が居ることで形にすることができる。お互いが適当な距離の中で、各方面で活動する人がいて、その集合体が地域づくりに繋がると思います。」

BOOKS

『地域再生～行政に頼らない「むら」おこし』

豊重哲郎 著

ここまで見事に地域再生を実現した集落を私は知らない。鹿児島県の大隅半島の中ほどにある人口300人、通称やねだんと呼ばれる柳谷集落。過疎化・高齢化が進み、住民の意欲も停滞しているどこにでもある集落。この集落の再生のため立ち上がった稀有なリーダー豊重哲郎という男が、闘病の中、後世へのメッセージとして書き下ろしたものがこの本である。豊重氏の魂の叫びであるこの本を呼んで感動しない訳がない。その後、奇跡的に病気も回復し、さらなる活動に邁進中である。豊重氏は言う、地域づくりは精神論だけではダメ。お金も必要と。16年前、自治公民館長（町内会長）になった豊重氏は、その時点で仕事も辞め集落再生に全てをかけた。集落民の意欲を高めるために、集落民総出の公園づくりを手始めに、独居老人宅への緊急警報装置設置、集落を離れた子どもたちが綴った親へのメッセージ放送、子どもたちへのおはよう声かけ運動を進め、さらに、集落の自主財源づくりとして、ＰＢブランドの焼酎醸造、農産物加工品の販売、集落内食堂の運営など企業的活動を展開。また、空き屋を活用した芸術家の移住促進による人口確保と文化の薫り高い地域をめざす。その結果、人口と自主財源は右肩上がり。活動10年目には、集落の全世帯に１万円のボーナスを渡すまでになった。５年ほど前からは、全国の地域を再生するとして、「故郷創世塾」と称するリーダー養成塾を一集落が行っている。

日本全国、またアジアからも毎年三千人以上の視察者が訪れ、韓国にはやねだん焼酎を備え、やねだんの地域づくりを店内ビデオで放映する居酒屋が２軒登場した。韓国から視察に来て、あまりに感動したため、店までつくってしまったとのこと。

豊重氏は、命令型では人は動かない。感動が人を動かし、地域を動かすと言う。豊重氏の持論とやり方は、特別ではなく、どこの地域にも通用するノウハウであると確信する。

■発行：出版企画あさんてさーな

2004年発行　定価2,000円（税込）

※書店での注文になります。

特集

株式会社きのとや 代表取締役 長沼 昭夫氏

北海道農業の可能性 ～販売ルートの確立と付加価値化～

長沼　昭夫（ながぬま　あきお）氏
札幌市生まれ。昭和58年(株)きのとやを設立。北海道洋菓子協会会長、スイーツ王国さっぽろ推進協議会会長。

―道産大豆の黒千石を使ったお菓子『まぼろしの黒千石』を昨年五月から発売されていますが、黒千石に着目された理由を教えてください。

長沼／『きのとや』は、北海道の食材にこだわりを持っています。

北海道大学西村孝司先生の講演を聞く機会があり、そこで黒千石には機能性成分が豊富に含まれている事を知りました。また、黒千石を使ってお菓子を作ったら良いのではとのお話がありましたので、是非挑戦してみたいと思いました。

―商品化までご苦労がありましたか。

長沼／美味しお菓子を作るには、使用する素材そのものが美味しい必要があります。黒千石を焼いたり、煮たり、蒸かしたりいろいろ試作を繰り返しましたが、なかなか良い商品ができませんでした。諦めかけていた時に、西村先生から黒千石を加圧・加熱したドンを使ったらどうかとのお話がありました。ドンすることで豆自体がすごく食べやすくなりましたので、そこから一気に商品化することができました。

―社長は昔、新冠で農業をされた経験もあり、農業に対する造詣が深いと聞きましたが。

長沼／農業に対して興味、関心はすごく持っています。ただ、造詣は深くありませんが（笑）。

私の父親は道庁職員で、土壌肥料の農業専門技術員でした。長野から単身、農業をするため北海道に渡ってきたのですが、自分の夢を果たせないまま五十七才で他界しました。

大学生の頃、ユートピアを作りたいと夢を語る大学の先輩から、一緒に農業をやらないかと誘われました。母親から父親の夢を聞かされたからでしょうか、私は大学を卒業してまっすぐ新冠の山奥の離農地に入り、酪農や養鶏、畜産業を始めました。

―経営はどうでしたか？

長沼／農業はそう簡単にはいかない。大学の先輩三人と始めたのですが、順調な時は良いのですが、うまくいかなくなると意見も分かれ、なかなかうまくいきませんでした。

―失敗の要因は何だったのですか？

長沼／市場の相場に振り回されたのが最大の原因でした。当時は日本列島改造論で、田舎の何もない山村でも地価が上がるような時代でした。生まれたばかりの仔牛は、普通五千円から一万円が相場なのですが、一時期八万円から十万円まで上がったのです。仔牛を買い、一年間育成して本州の肥育業者に売るのですが、売価が仔牛の買価を下回ることもありました。

また、牛を解体して自分で売るという事にも挑戦したのですが、素人の肉屋なので長くは続きませんでした。

―現在はお菓子屋を経営され、農業とは業種が大きく違うと思いますが。

長沼／人間の運命はわからないものですね。ちょっとしたはずみから、お菓子屋をやることになり今に至っています。最初は素人でしたので苦労しましたがケーキの予約販売や宅配を始めたところ評判となり、経営が軌道に乗りました。これまで、食中毒の発生や予約したクリスマスケーキの生産が間に合わないなどの危機的な時期もありましたが、お客様に誠心誠意対応する事で信頼を積重ねてきました。

―農業に対する思いは、今もお持ちですか。

長沼／「いつか農業をやるぞ」という思いを持ち続けてお菓子屋をやっています。一昨年、長沼町で『きのとやファーム』を立ち上げ、農業生産法人を取得して、私どもの社員が社長として行っています。自分が出来なかった夢を後輩に託した感じでしょうか。

―『きのとやファーム』について、もう少し詳しくお聞かせください。

長沼／ハスカップやブルーベリーなどのベリー類を主に栽培し、生産物は『きのとや』が購入しています。生産者は、買い手

黒千石がたくさん入っていて、
美味しいよォ♪

が決まっているので安心して生産できます。

販売ルートをしっかり造りながら経営していく、これは一つの新しい農業のモデルになり得ると思います。

―これからは生産者が自ら加工販売することが必要ですが、なかなか難しいようです。

長沼／生産者の方は物を作る事には熱心ですが、売る事にはあまり労力を使おうとしませんね。物を売る事は大変です。でも自分で作った農産物をより高く売る努力をすべきです。そのためには、消費者や買い手が何を求めているかを知る事が必要ですね。

―農家や加工販売している方々に、何か助言アドバイスすることはありますか。

長沼／自分のところで自ら付加価値を高めるべきだと思います。農家は農産物を作ればいいだけではダメだと思います。

昨年の八月上旬、南フランスアジャン地方のあるプルーン農家に行ってきました。規模は北海道の農家とかわりません。この田舎の小さなプルーン農家は、生産したプルーンを自ら加熱処理、真空密閉して、独自の販売ルートを開拓し、付加価値を付けて全世界に販売しているのです。そして日本にも輸出しています。これは凄いと思いました。

―北海道でも出来るでしょうか。

長沼／北海道は特にそうですが、生産活動できる期間が限られています。問題はそれ以外の時期に、どれだけ生産的な仕事ができるかが非常に大事です。収穫後に冷凍・保冷などで保存し、冬の間に加工をするなど一年中生産的な活動ができるサイクルを作っていかないと、農業で自立するのは難しいと思います。

―社長が取り組まれている『スイーツ王国さっぽろ』も、お菓子の付加価値を高めるのが狙いなのでしょうか。

長沼／『スイーツ王国さっぽろ』は、札幌をスイーツの街にしようという運動です。地域が一体となって取組むことで初めて札幌をスイーツの街に出来るのであって、「きのとや」１社では不可能です。札幌をスイーツの街にすることによって、札幌市民自体がそれを誇りに思ってもらう。「札幌のスイーツ美味しいよ。是非札幌に食べにきて」、スイーツの文化を全国に、世界に発信できたら素晴らしいと思います。

―最後に、我々行政など側面的に支援する人たちに対して注文はありますか。

長沼／私は、行政に頼らない方が良いと思っています。町おこしというと、地方に行けば行くほど行政頼り補助金頼りです。補助金がもらえるからこれをやるといった話では、補助金が切れた時に終わってしまいます。

今回のスイーツ王国さっぽろ推進協議会は、札幌をスイーツの街にしようと民間のパティシエが集まり札幌洋菓子協会が中心となって狼煙を挙げました。それに札幌市がついてくる理想的なパターンです。

活動を側面から支援するのが行政の役割で、行政主導で後から民間がついて行くと、行政が降りたときには自立できなくて終わってしまうパターンが多いと思います。機運が高まったときにそれを行政が側面から支える、そんな関係が上手くできれば良いと思います。

「一社一村しずおか運動」の紹介

静岡県では、都市と農村の交流人口の増加により活性化を図るため、平成１７年から「一社一村運動しずおか運動」に取り組んでいます。

一社一村運動とは、農村の要望（「人手がほしい」「交流を増やしたい」「安定した顧客がほしい」「一緒に特産品を開発したい」）と、企業の要望（「社会貢献をしたい」「社員福利厚生に活用したい」「地域の資源をビジネス化したい」）を結びつけ、企業と農村が協働活動することで農山村地域の活性化を図る運動です。

静岡県が、農村と建設会社や大学、社会福祉法人など企業や団体の要望を把握し、マッチングや調整をして認定しています。事例認定は、平成２３年１２月２８日現在で、県内２７地区３４組となっています。

「一社一村しずおか運動」の詳細については、静岡県の下記のホームページをご覧ください。

http://www.pref.shizuoka.jp/kensetsu/ke-630/issyaisson/about.html

トピックス

○平成２３年度地域づくり研修会の開催報告

平成２３年１０月３日（月）札幌市内ホテルで開催した地域づくり研修会には、全道各地の里づくりアドバイザーや地域づくり実践者など２００名以上が出席しました。

講演は、参加者の期待以上の内容で、多くの方から反響を頂きました。この研修会で得たことを、皆様と一緒に今後の地域づくりに活かしていきたいと思います。

講演：椎川氏
国の政策「緑の分権改革」とは地方に権限や財源をできるだけ下ろしていこうというもの。
地域資源と人間の力を活かして、地域力を創造していかなければならない。

講演：髙橋氏
地域づくりはどうすれば良いのか。
地域づくりの三大要素は「人」「物」「場」。
地域の人が考えを伝える「場」が、今不足している。そういう「場」を作ることで、この三つのバランスを取り戻していこうというのが私の考え。

○ 現地研修会の開催報告

第１回現地研修会

日　時　平成２３年６月２８～２９日
場　所　雨竜町
参加者　１８名
- 道の駅「うりゅう」雨竜沼自然館
- 暑寒パストラル地域現地調査
- 温故知新館（農業生活歴史資料展示館）
- 炭焼き、そば打ち体験　など

意見交換
- 地域の魅力づくりと交流の活発化に向けて必要な取組について
- 里づくりアドバイザーとして今後取り組んでいきたいこと

第２回現地研修会

日　時　平成２３年１０月２６～２７日
場　所　江差町、八雲町
参加者　２２名
- 江差町伝統食文化の伝承活動
- 江差町歴史を生かす町並み整備
- いにしえ街道の取り組み状況調査
- 小林農園「茶房ひがしの」
- 八雲パノラマパーク及び物産館
- 元山牧場「エルフィン」

意見交換
- ファームネットやくも及び農産物の付加価値化と地域交流の取り組みについて

【編集部から】

昨年は、東日本大震災が日本全体を揺るがし、ＴＰＰで国民的な議論が巻き起こりました。人と人、地域と地域の結びつきが大切であると叫ばれるようになり、中央重視の視点から自分たちの地域は自分たちが真剣に考えようという機運が広がりました。このような動きは、今後益々加速するものと考えます。

このような中、事務局として今後とも自律的・内発的な地域づくりに向けた支援をより一層進めていきたいと考えますので、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

第２回現地研修会（交流会にて）